

# 小さい太郎の悲しみ

新美南吉

## 一

お花畑から、大きな虫がいつぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角の方へのろのろとゆきます。みていた小さい太郎は、縁側からとびおりました。そしてはだしのまま、ふるいをもつて追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤（どて）の上で、虫をふせました。

とつてみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとった」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎は縁側にもどつてきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫をとった」

とみせました。

縁側にすわっていねむりしていたおばあさんは、眼をあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

といって、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹だろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといって、ふたたび眼をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんの膝から糸ぎれをとつて、かぶと虫のうしろの足をしばらくしました。そして縁板（えんいた）の上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、まえへ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きっと、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きっとそれを知っているのです。

そこで小さい太郎は、大頭に麦わら帽子をかぶり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑の中の金平（きんぺい）ちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面鳥を二羽かつていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいってゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったからです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金平はのオ」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむそうな声でした。「金平は、よんべから腹がいうてのオ、ねておるだで、今日はいっしょに遊べんぜエ」

「ふうん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎はいけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平ちゃんのお腹がなおれば、いっしょに遊べるからいいと思いました。

## 三

こんどは小さい太郎は一つ年上の恭一（きょういち）君の家にゆくことにしました。

恭一君の家は小さい百姓家でしたが、まわりに、松や椿や柿や橡（とち）などいろんな木がいっぱいありました。恭一君は木登りがじょうずでよくその木にのぼっていて、うかうかと知らずに下を通ったりすると、椿の実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。また木にのぼっていないときでも恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わつといっぴりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もう油断ができませんのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりとすすんでゆきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わつといっぴりあらわれてきません。

「恭一はな」と、鶏に餌をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。「ちよつとわけがあつてな、三河（みかわ）の親類へ昨日、あずけただがな」

「ふうん」

と小さい太郎は聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でいいました。なんとということでしょう！ なかのよかった恭一君が、海の向こうの三河のある村にもらわれていつてしまつたというのです。

「そいで、もう、もどってきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はきました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「ぼん  
盆や正月にやくるだらあずに」

「ほんとだね、おばさん、盆と正月にやもどってくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一君と遊べるのです。正月にも。

#### 四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそつてありました。その家の安雄（やすお）さんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣（じん）とりをするときでも、かくれんぼをするときでもいつしよに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちからとくべつにそんなけいされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、と思つたからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまである格子（こうし）に、くびだけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石（といし）でかんなの刃（は）をといでいました。よくみるときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力るんじゃねえといつたら、わからん奴だな」

とおじさんがぶつくさいいました。安雄さんは刃のとき方をおじさんに教わっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方をいつまで待ってもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつもは子どもにむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きようは、何かほかのことで腹を立てていたとみえて、太い眉根（まゆね）をぴくぴくと動かし

ながら、

「うちの安雄はな、もう今日から、一人前のおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」

と、つっぱなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないように、かすかに笑いました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼をむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子からはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

## 五

小さい太郎の胸にふかい悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういつしよに遊ぶことはないのです。お腹がいたいなら明日になればなおるでしょう。三河にもらわれていつたつて、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかしおとなの世界にはいった人がもう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎はべつの世界にいるのです。いつしよに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにもものぞみがこのされていませんでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくなることができます。ないて消すことができます。

しかしある悲しみはなくなできません。ないたつて、どうしたつて消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなくなることのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上に一つきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみるように、眉をすこししかめながら長いあいだみているだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――

底本…「新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ」大日本図書

1982 (昭和57) 年 3 月 31 日初版第 1 刷発行

1996 (平成 8) 年 2 月 15 日初版第 7 刷発行校正…諸富千英子

2018 年 2 月 25 日作成